平和研所内会議

2011 年 10 月 17 日(月) 開催
テーマ:「イラン・イスラム革命　その歴史的考察」
報告者:長谷川　和年(研究顧問)

概要

昨年来、多くの中近東諸国で政変が発生し、絶対的権力を有するとみられてきた支配者が、政権から追われ、或いは消されている。このような国際的事変に応じて(と思われるが)、イスラム世界、或いは中近東に関する解説書が最近書店に並んでいる。

これらの解説書は、必ずと言っていい位、イランのイスラム革命に言及している。イラン革命が、これら中近東諸国の政変の遠因の一つであるかの如くふれられている。

私は、1978年8月から1980年8月まで、即ち、イラン革命の直前から、革命後まで、在イラン日本国大使館に在勤し、この革命自体及び前後の情勢をこの眼で見て、また体験している。しかし、私がみた限り、これら解説書の著者は、誰一人、革命時、イランに居なかった。当時、イランに居た唯一人の日本人の社会科学者は、東京大学東洋文化研究所の大野盛雄教授のみであった。大野教授のイラン政治、社会情勢の分析は誠に正確で、教えられる点が多かった(大野先生の分析、ご意見については、以下に述べる)。

パーラビ王朝の国王、シャーは英邁な君主であったと思う。彼は日本を尊敬し、イランを「西の日本」にすべく努力した。その目的の為に彼が取った政策が、所謂、「白色革命」(共産主義ー赤色でないの意)であった。主なものは、農地開放、婦人参政権の実施等々であった。イランでは、モスク(僧院)が歴代大地主であったが、シャーの農地開放により、僧院、僧侶の所有地は接収され、分割、開放された。その結果、彼等の経済的地盤が破壊された。また、イランは国民皆兵制で、従来、僧侶は兵役を免除されていたが、シャーは、この兵役免除を撤廃した。これらの施策は、イスラム教僧侶及び僧院をして「反シャー」で結束させることとなった。

農地開放は一般的には良い施策であるが、イランでは、農地開放の結果、農民の大多数が貧農となった。と言うのは、従来、大地主に雇われ、何がしかの手当を貰って、鞭でたたかれつつ農作業に従事していた貧農の大部分は、元来怠惰で自作農になっても勤勉に働かない。そのうちに折角与えられた農地を売ってしまう。その金で大麻を入手して、麻薬三昧の毎日を送る。気がついた時は、農地を売った金子も底をつき、大麻も、日常の穀物も入手できなくなっている。そこで彼等は、自分を責めないで、自分達に農地を与えたシャーを恨むこととなる。そして、地域のモスク(イスラム教の僧院)に駆け込み、自分の苦情を訴え、シャーを批判する。モスクのムッラー(僧侶)は、「待ってました!」とばかりに激しいシャー批判をする。このようなプロセスで、ムッラー、モスクは、貧農を反シャーの大勢力に育て上げた。

© Institute for International Policy Studies 2011

革命後にテヘラン大学を出て渡米し、ハーバード大学で勉強して学位を取り、コロンビア大学で政治学の教授となった、イラン人のダウシは、「イラン革命は、イランの上流及び中流階級に対する、貧農及び都市の下層階級の徹底的な報復だ」と断じているが（この「上流及び中流階級」には、白色革命の結果、新たに土地を取得した豪農及び大農が含まれている）、非常に的を射た分析である。

シャーの政策目的は良かったが、イランにこの様な理想的な政策が根付く土壌が存在せず、また、シャーに正しく助言する政治家、上級官僚が存在していなかったと言うことである。

或るアメリカの政治学者は、イランのシャーと、ホメイニ師、そしてアメリカのカーター大統領の三者が話し合い、シャーが白色革命を撤回し、宗教界の反シャーの態度を是正させ、カーター大統領には約10万人と言われた米国軍人及び軍属の駐在を継続して認める代わりに、理不尽で一方的な「人権外交」の実施を止めさせる、これが実現していれば、イラン革命など起こらなかっただろう、と言っているが、これは一面の真理があると思う。

シャーの秘密警察SAVAKは、反シャーと思われる人間を無法に逮捕して、EVINの収容所に何千人と収監した。カーターの強い圧力により、革命前に4千人と言われるこれらの「反シャー」分子が一度に釈放されたが、それらの大部分は今度は本当に「反シャー」となり、革命のプロセスを加速させたと言われている（私の友人の或るイラン人のインテリは、フランスのソルボンヌで文学を勉強したリベラルな人間だが、革命前に帰国したら、単に「リベラル」であるという理由で逮捕されてしまった。これが一例である）。

イスラム教徒に大きな打撃を与えた白色革命、そして米国の過度の人権外交、これらが無ければ、シャー体制の安定は、当分は維持されたかもしれない。

もともとイラン人の大半は（下層階級を含め）非イスラムであった。反シャーの動きが激しくなり、1979年1月16日にシャーは国外に脱出した。2月11日に反シャー派がシャー支持勢力に勝ち、ここに革命が成就した。その後、3月30日にイラン・イスラム共和国樹立の賛否を問う国民投票が実施され、圧倒的多数がこれに賛成し、4月1日、ホメイニ師はイラン・イスラム共和国の樹立を宣言した。

振り返ってみると、イラン革命は終始、イスラム教の僧侶（アヤトラ及びムッラー）により反シャー勢力が組織され、反シャー闘争が展開され、結果、成功した。「反シャー」ということで貧農及び都市の下層階級が組織され、シャー支持勢力と闘い、勝利をおさめた訳であるが、この革命のプロセスで、イスラム教がいかなる役割を果たしたかは分明でない。イスラムの僧侶（ムッラー）が貧農、下層階級の苦情に耳を傾け、彼等を反シャーの大勢力に結集したのは事実だし、イスラム教徒の尊崇するアヤトラ・ホメイニ師がその頂点に居て、海外（当初イラク、次にフランス）から、ラジオで「反シャー」を唱えていたが、これが案外効果があったと思う。

革命成就の直後、2月17日に、アラファトPLO議長が大代表団を率いてイランを訪問したが、PLOはフェダイン、ムジャヘディン等の武闘グループに武器を供与し、テロリスト

© Institute for International Policy Studies 2011

訓練を行うなど、革命プロセスの早い段階から反シャー勢力を積極的に援助していたことが後になり判明した。当時イランは、中東でイスラエルと国交を有する唯一の国で、良好な外交関係を維持していた。PLOが反シャー勢力を援助し、最後の段階では、テヘランにおけるシャー支持勢力に対する市街戦の作戦まで指導していたと言われる。

イラン・イスラム共和国は、行政面における試行錯誤を約1年にわたり繰りかえし、徐々に安定していった。

以上

© Institute for International Policy Studies 2011